目　　次

信仰者の歩みに思うこと.....1

ルツ記から学んだこと.....2

詩篇 23 篇を読んで.....8

主のいつくしみについて.....14

黙って耐えられたイエスさま.....19

三本の十字架.....21

忍耐して走り続けようではありませんか.....25

風雨の日に.....31

“My Little Journal” (March, 2019 Edition)
© 2008 - 2019 by Teruyo Grace Nakao

信仰者の歩みに思うこと

「まわりの人はみんな素晴らしい信仰者なのに、私はすぐ神を疑ったりしてしまう罪深い者なんです。私なんかクリスチャンにふさわしくないと思います。」というような悩みを、時々聞くことがある。そんな時、私は「あなただけでなく、真面目なクリスチャンはみんなそういう所を通るんだと思います。」と、少し自分の体験を証しする。

人の目にはどうあれ、私たちの信仰の歩みも人生の歩みと同様、山あり谷ありで、そんなにいつも「ハレルヤ、感謝」だけではないと思う。未知、未経験の大きな困難に直面するような時、人間関係の諸問題に悩まされたり、躓きを覚えたりする時、すべての骨折りが無駄だったと感じるような時、失敗を通して自分の弱さ愚かさを思い知らされる時、私たちは冷静な状況判断ができなくなったり、内面の整理がうまくいかなかったりする。

そんな時は、すぐ主に祈り、みことばを信じ、委ねることが肝心だと、十分わかっているのに、その通りにできない事がある。「わかっている事と、わかっているように生きる事とは違うんだ。」と、私の父はよく家族を叱ったが、信仰者の場合も、わかっているように生きることのできない時もあるのではないかと思う。「なぜ？どうして？」と心に湧いてくる疑問に捕らわれて、納得のいく答を見つける方が先決になってしまい、信仰の足が地に着かないような状態に陥ってしまう事が時々ある。これは信仰者として良くない事だと、あせりつつも…。

聖書にも、特に詩篇には、信仰者の疑惑や葛藤、悲痛や苦悩 不安や恐れ、怒りや口惜しさ、やり切れなさ等が包み隠さず書かれている。神を信じる者が、神を信じるゆえに神にぶつける心の叫びがリアルに描かれて

いる。そしてそんな中に、主への賛美、感謝が歌われている。神を信じる喜びと希望と活力が随所に光っているのを見る。昔の聖徒たちも、暗闇の道を経て光を見出し、勝利の道へと進んでいったのだと教えられる。光の高地へ行くために、涙の谷を通過しなければならなかったのだと…。

今、私たちがどんな状態であっても、主のもとを離れないでいれば、必ず信仰の大路に出られるようになる。その大路を確かな足取りで歩く者へと成長させられる。そう信じて、主を待ち望む者でありたいと思う。

ルツ記から学んだこと

ルツ記は、信仰と愛の美しい記録です。嫁と姑の美しい愛の記録です。神の民と異邦の民が、神を尊んで愛し合い、助け合った美しい人間愛の記録です。そこに神さまの愛と、すばらしいご計画が見える事実物語です。

しかし、この美しい物語の舞台背景は、大きな苦難と人間の深い悲しみであることがわかります。昔も今も、本当に美しい愛の物語は、悲しみや苦しみの中で生まれるのではないかと思いました。ルツ記1章1節～18節を見ますと、ナオミの家族が、母国がひどい飢饉になったので、生き延びるために異国の地モアブに行ったことがわかります。人は時に、生きてゆくために自分が望んでいない、やむを得ない選択をしなくてはならないことが、あるのかも知れません。昔、日本人

も国内では生きていくのが難しい状況だったので、アメリカや南米など、海外に出て行って苦労したと聞きます。

ナオミの一家は、モアブの地でずいぶん苦労した事が読み取れますが、「モアブの野」とありますから、開拓ではなかったかと思われます。開拓の野良仕事は、男性により多くの負担がかかるわけですが、ナオミの夫は家長として苛酷な労働に耐えに耐えていたのではないかと思われます。「ナオミの夫は死んだ」とありますが、今でいうと「過労死」であったか、毒虫か毒草にやられたのかも知れません。それから二人の息子も早死していますが、同じような原因が考えられると思います。中年の男性ならいざ知らず、活力溢れる若者が相継いで死ぬ、という環境はどれほど苛酷だったことでしょうか。ナオミも当然、野での仕事も手伝いながら、主婦として、男性に劣らず苦労したであろうと思われます。後で、自分の事をマラ（苦しみ）と呼んでいますから。ナオミは、夫と二人の息子に先立たれて、苦しみや悲しみを打ち明けられる友人もなく、助けてくれる親戚もない、心細さと孤独の辛さにもじっと耐えていたと思います。

夫や息子たちとの死別の悲しみに加え、男手がなくなったための生活の困難は、想像を絶するものだったのではないかと思われます。しかし、それでもナオミは信仰と愛を失いませんでした。人は、あまりに辛いことがあると、不平不満ばかりを口にするようになってしまったり、周囲に辺り散らしたり、心がかたくなになって、人を愛せなくなったりするのですが、ナオミは信仰があったから、苦難や悲しみの中でも、愛を失わずにいられたのだと思います。人間の力だけでは、酷い悲しみや苦しみに押し潰されてしまう事でしょう。

神さまは本当に恵み深いおかたです。このナオミに、またとないようなすばらしい二人の嫁、オルパと

「試し読み」はここまでです。

お気に入りましたら

ご注文ください。

Penguin Club
www.penguinclub.net